

寛

俺は行く。先日望月とも話し合ってきたことだ。聞け、おれの話の聞け。……おれはなにも、おれが武士だったから、関ヶ原で西軍に与してたたかった豊臣恩顧の大谷吉継の家臣だったから、行く、というんじゃない……あれから十四年、いまさら豊臣に忠義立てでもねえ。……ただよ、いま、おれは武士だった、といったな？……そうさ、おれは生まれて十九年武士だったさ。しかし関ヶ原から十四年、おれはなんだ？……おれはお前らといっしょに泥棒もした、関ヶ原残党の多くがそうなったようにな。押しがりゆすり詐欺ばかり、ツツモタセまでやったなお霧、お前が娘らしくなってきた。百姓には、やはりなれなかった。詮議がきびしかったからな、いつか佐助のいったように。……追われ追われて食いつめて、殿、いまはツツモタセに乗せそこなったあなたの居候だ。毎日あたりの土地を開墾したり、真田紐を組んだり、売ったり、その日の飯はどうやらやっと。……幸村公、ご好意には感謝しています。しかし、この生活は、いったいなんだ、ここで私は、結局なんなのだと思うんですよ。私はもはやけっして武士ではない、しかし百姓ではない、商人でもない、つまり、なんでもない。私は耐えられないんですよこの生活に、この生活がいつまでつづくのかわからないことに。ぜいたくな望みかもしれない。しかし私は、私がやはり、なにかでありたい。なにかこう、はっきりした、ちゃんときまったものでありたい。そうでなければ生きにくい。息がつけない。……決心したんですよ私は、ひとりでも大阪方に参加すると。だが、私はあなたにもきてほしい。隊長として、私たちを指揮してほしい……（幸村寝たまま）

「真田風雲録」より抜粋（福田善之）